様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２４７６

研究課題名（和文）日本近現代文学における聴覚要素の表現的特徴に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A basic study on the expressive features of auditory elements in modern Japanese literature

研究代表者
真銅　正宏（SHINDO, Masahiro）

追手門学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：８０２４３６７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：小説は文字だけで構成される芸術である。そこには音は聞こえない。本研究は、言語芸術である小説の中に描かれる聴覚要素が、どのように読者に伝達され、そこでどのような表現効果を持つのかについて、日本近現代の多くの小説を対象に研究した。作者が聴かせたい音は、ある場合には、作品の物語の枠組みを示し、作中の雰囲気を予兆し、また、登場人物の造型や状況、性格や人間関係などを譬喩的に示すものとして機能する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
作者が小説作中に音や音楽を描くことで、読書行為において何が変わるのかについて明らかにすることにより、小説などの文字だけでできた言語芸術を鑑賞することの本質、すなわち、本来描かれていない音などを想像力をもって読者が再現することにより、読書が果たす認知的役割が明らかになる。これは、音楽に関わる美学的な研究分野にも波及する論点と考える。また、主たる対象とした大正文学自体が、研究対象としては不遇であり、これに着目することで、文学史の見直しの契機になることも期待できる。

研究成果の概要（英文）：A novel is an art consisting only of letters. There is no sound there. In this research, I studied how many auditory elements drawn in novels, which are linguistic arts, are transmitted to the reader and what kind of expression effects there are, in many modern and contemporary Japanese novels. The sound that the author wants to hear, works in some cases, indicates the framework of the story of the work, predicts the atmosphere in the work, and also as a metaphorical description of the character's modeling and situation, personality and human relationships.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：文学　音　聴覚要素　近代　小説　再現　読書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

小説における音や音楽を扱った先行研究としては、中村洪介『日本近代文学と西洋音楽』（春秋社、1987 年）などが知られるが、対象を西洋音楽に限るだけでもかなりの大著となっている。また、文字芸術の中の音の効果についての原理的考察の書は、未だ見られない。

音楽要素以上に、音そのものの表現を扱う作品に殊更に着目し、音の表現の効果についての考察を行う点はこれまでにあまり見られなかった試みである。

また、音楽についても、これまでのように、著名な名曲を扱うことを中心とするのではなく、人の歌声や、市井の雑踏の中で聞こえる雑多な音楽、また祭囃子など、人為的な音の次元に関わるものに関する作品を意図的に対象とする。そのことにより、これまで中心的な研究テーマであった文学と音楽という二つの芸術分野の交流といった枠組みではなく、あくまで小説や詩歌などの文字芸術という無音の世界における音の表現の効果という側面を重視する。このことは、研究史においても、あまり注目されてこなかった点に光を当てる効果が見込まれる。

なお、申請者は、2016 年 6 月 9 日から 10 日にかけて、イタリアのローマ大学で行われた、Food and Culture と題された国際的カンファレンスにおいて、Japan’s Food and Cross-Cultural Acceptance: Sushi, Tempura, Pasta and Wine　と題して招待スピーチを行った（10 日）。この口頭発表は、文学作品の中の味の表現に関するものであり、本研究課題と密接に関連する。日本文学における表現の問題は、イタリアの日本研究者にとって興味深いテーマであるとのことで、この時から、ローマ大学の日本研究者と研究交流が始まっている。またナポリ東洋大学の Giordano 講師は、申請者のゼミナールの出身であり、現在も日本語の表現について機会のある度に意見交換している。本研究のテーマである日本文学および日本語の表現の特徴についての成果を海外に発信するために、絶好の環境が整っている時期であると考えられる。

申請者はこれまで、日本近現代文学に描かれた五感表現について研究を重ねてきた。『食通小説の記号学』（双文社出版、2007 年）においては、味を描く小説を対象として、その表現可能性について検討した。また、『触感の文学史』（勉誠出版、2016 年）においては、小説におけるさまざまな触感表現、例えば、茶道における碗の手触りや、兎や蛇の触感について、その読者へ働きかける表現の特性について検討してきた。さらに、2016 年 9 月には、神戸大学より、『日本近代文学における五感表現の総合的研究』という学位請求論文に対し、博士（文学）の学位を授与された。ここでも、味覚、触覚、嗅覚の三つの感覚表現について論じている。

一方、本研究でも扱った聴覚については、かつて、『永井荷風・音楽の流れる空間』（世界思想社、1997 年）において検討を加えたが、この際には、対象を永井荷風の小説の中に描かれた音楽を中心に扱ったため、他の作家の作品や、音楽以外の音などについては、研究の十分な展開を行っていない。そこで、これらの研究実績を踏まえ、五感の研究の一環として、音楽として形式化されていない音を重点的に扱う研究を行うこととした。

２．研究の目的

日本近現代文学に描かれた、音や音楽などのさまざまな聴覚要素について、読者が読書途中にどのように再現するのかという伝達の仕組みを探り、その表現の与える効果について考察する。題名が書かれた著名な楽曲であっても、読者が必ずしもその音を、読書途中に脳裏に音を再現し、追体験として「聞く」とは限らない。その一方で、その音楽をよく知る読者にとって、その音楽を思い浮かべながら読むという行為が、読後感を豊かにすることも想像される。音や音楽を描くことで、読書行為において何が変わるのかについて、その表現効果に着目し、多くの用例を集めて総合的に探究することで、小説などの文字だけでできた言語芸術を鑑賞することの本質を明らかにする。これは、音楽に関わる美学的な研究分野にも波及する論点と考える。

３．研究の方法

本研究においては、日本近現代文学において、音や音楽が効果的に描かれた作品を、近現代文学の作品中から網羅的に選び、音楽という芸術作品に限らない、音そのものの表現に主に着目しながら、小説という文字芸術において、聴覚要素がもたらす表現効果について総合的に研究する。

まず、日本近現代文学の中で、音や音楽的要素をタイトルに持つ作品を網羅的に収集する。その上で、ここに集められた作品に含まれる表現の特徴を考察し、分類項目を立てて整理する。次に、分類項目毎に、その表現効果について考察を加える。これらと並行して、文字芸術における音などの聴覚要素の伝達の仕組みについて、記号学的考察を加える。以上の分析から得られた論考を発表する。文字芸術における聴覚要素の表現効果について総合的に考察するためである。

音の表現が書かれた文学作品は膨大な量を誇るので、3 年間と区切った研究期間の中で効果的な成果を出すために、当初は収集対象を限定する。

まず、明治期から昭和期に到る文学作品の中で、雨や風、虫の声などの自然の音をタイトルに持つ作品に限定して、収集し、その効果について、考察する。研究の過程で、作品の冒頭部に、やや象徴的な音が用いられる場合が多いことが明らかになったため、作品冒頭を集中的に考察した。

次に、近代の中でも、対象を大正期に限定し、『編年体大正文学全集』（ゆまに書房）に収められた作品をまず手初めとして、その後、大正期のあらゆる文学作品の中から、音や音楽的要素に関するタイトルを持つ作品を収集し、その表現の効果について考察した。

４．研究成果

五感のうちでも、音や音楽などの聴覚要素は、小説などに表象されることが多い要素である。描写の一部として、音についての表現は、多岐にわたる。おそらく、聴覚が、視覚を補完する最も馴染みある感覚だからであろう。例えば、テレビやビデオ、映画などは、視覚と聴覚だけで構成されている。

一方、小説は文字だけで構成される芸術である。そこには映像も音もない。ただ文字から読者が自らの想像力を駆使してそれらを再現する。

ここで、読者が理論上の一般的存在から、具体的な個々の特殊な存在へと転換する。何かを再現するための体験が、個々の読者によって異なるという事実が、読書行為の一般化を拒むのである。例えば、それを読者が聞いたことがあるかないかによって、作中に描かれた音、典型的には音楽の効果が、決定的に相違することが予想される。

しかしながら、その体験の有無とは別に、聞いたことの無い音楽についても、読者がそこに何かが聞こえているという前提で読み進めるのも事実である。

音の再現をめぐる一連の研究は、この読書行為の仕組について、音を対象に、その小説における表現を広く収集し、原理的に不可能な伝達の可能性を、できうる限り一般的なものへと引き上げようとした、作者たちの方法的な努力の跡を追い、小説における工夫の類型を見ようとするものである。

例えば村上龍の「限りなく透明に近いブルー」（『群像』一九七六年六月）の冒頭は、その表現だけを一見すると、通常の風景描写のようでありながら、作品に展開される実に特異な世界を読み終えた後に、再びそれを読み返してみると、既にそこに、その予兆が示されていたことがわかる。

飛行機の音ではなかった。耳の後ろ側を飛んでいた虫の羽音だった。蠅よりも小さな虫は、目の前をしばらく旋回して暗い部屋の隅へと見えなくなった。

いうまでもなく、小説は文字芸術であり、音など聞こえない。しかし、この文章における虫の羽音は、読者には不快感と共に確かに伝わるであろう。

ここでもう一つ指摘しておきたいのは、音が誤解されて認識される事実である。特に、最初は姿が見えず、音だけが認識された場合、聴覚のみによる想像力は、視覚的判断より鈍く機能する。言い方を換えれば、聴覚による認識の方が、視覚より想像力の関与が大きいとも言えよう。この不確かさが、冒頭に置かれることで、主人公の状況が間接的に提示されているわけである。

以上見てきたものは、概ね、開巻すぐに読者の注意を惹こうと工夫された冒頭文と一応まとめることができよう。これらに対し、当然ながら、極めて自然な世界の始まりを示す音が描かれた作品もある。例えば石川達三の「四十八歳の抵抗」はその代表例であろう。

秋の溜息

高窓のガラスに反射した朝日が、部屋の天井まで明るくしている。雨戸の外で百舌鳥(もず)がないている。鳥がないても天気がよくても、別に何という感激もない。九時二十三分。床に腹ばいになって煙草をすう。外で竹竿の音がする。さと子が洗濯ものを乾しているらしい。今日は熱海へ行くまえに床屋へ寄って、散髪をしようと彼は思った。

極めて自然な描写と言えよう。小説は必ずしも現実世界のすべてを描写するものではないが、これらが殊更に描かれることにより、その風景が「自然」であることが、却って読者に伝えられることになる。この仕組みは、一般的には気づかれにくいが、「九時二十三分。」という時の表現からもわかるように、小説の世界は、あえて書かなければ時間さえも不明であり、不要である。

永井荷風の「狐」は、少年時代の屋敷内での狐狩を題材にした作品であるが、その冒頭部は、「小庭を走る落葉の響、障子をゆする風の音」で始まる。これも実に繊細に自然の音を捉えた音である。

葛西善蔵の「哀しき父」の冒頭は以下のとおり、自然の音と人間が生活の中で出す音から始まっている。

彼はまたいつとなくだんくと場末へ追ひこまれてゐた。

四月の末であつた。空にはもやくと靄のやうな雲がつまつて、日光がチカく桜の青葉に降りゝいで、雀の子がジユクく啼きくさつてゐた。どこかで朝から晩まで地形ならしのヤートコセが始つてゐた……。

この冒頭の二文は、入れ替えても成立するかもしれない。多くの小説では、まず風景描写があり、主人公の紹介へと移っていく。しかしここでは先ず、「哀しき父」である「彼」の「場末」にある状況が、直截的に提示される。その後で描写された音は、この冒頭文と呼応し、「啼いてゐ」るのではなく、「啼きくさつてゐ」るのである。「ヤートコセ」は地固めの工事の囃子言葉であろう。

一見何気なく見えるこれらの表現には、そもそも、音を書き込む、という姿勢から、その工夫が始まっていたことがわかる。書かなくても、人物の行動だけでも、小説は成り立ちうる。

作者が聴かせたい音は、その作品の物語の枠組を示し、作中の空気を予兆し、登場人物の造型や状況、性格や人間関係などを譬喩的に示す。この働きは、既に開始されたテクストでありながら、パラテクストの代表的存在である題名と共通する部分も認められる。読者が題名の次に目にする冒頭部の一文は、読者にとって、その作品の世界への正しく「敷居」（Ｇ・ジュネット『スイユ』、和泉涼一訳、水声社、二〇〇一年二月）の先の第一歩なのである。

本研究において、改めて、小説の中の音や音楽の表現が、作者の工夫を反映したものであることが明らかになった。視覚表現に傾きがちな風景描写の中で、これら聴覚要素の描写は、あるいは臨場感を高めるというような具体的な効果の次元から指摘することができるが、そもそも言語芸術である小説において、聴覚要素を言語化すること自体、実は「自然」な描写から一歩踏み出している。作中では常に何らかの音が流れている可能性が高いが、それらすべてが描かれるわけではない。そこには、作者による選択と集中が行われている。

特に小説の冒頭部に描かれる音には、象徴的な意味合いが込められることが多いようである。

改めて、五感要素を、言葉に直すという作業の原理的な効果も認められることがわかった。

ただし、その表現効果は、作者の個性に委ねられる場合も多く、また、音の伝わりについて、時代的制約を受けることも想像される。「ヤートコセ」などのメロディーは、多くの人には再現できない。

本研究は基礎的研究として大枠を示すことはできたが、各論は限りなく広がる可能性を持つ。「開巻の音」についての論考は、その一端を示したものであり、継続的な研究が必要であることは言うまでもない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 真銅正宏	４．巻 12
２．論文標題 「泥の河」にみる、音による「大阪」の再現」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際教養学部紀要	６．最初と最後の頁 126-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 真銅正宏	４．巻 78
２．論文標題 書評・山本亮介著『小説は環流する―漱石と鴎外、フィクションと音楽』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 昭和文学研究	６．最初と最後の頁 207-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 真銅正宏
２．発表標題 村上春樹文学における音と匂い
３．学会等名 日本近代文学会北海道・東北支部合同研究集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考